

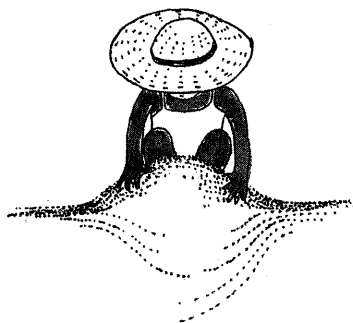
若いお母さんたちへ

おしゃべりに耳をかたむけて

はるにれの会

宮里 暁美

このコーナーに年一回書く機会をいただいて今年で三回目。我が息子も三才になった。第一回は、いい気分・幸せな気分と題し息子のしぐさの中にみられる気分を探り、思うことをつづってみた。第二回は、我が家の朝ということで父と息子の織りなす様々な朝を紹介した。今、ふと歩みを止めふり返ってみる。一才の息子と共について味わったこと、二才の息子について味わったこと、それら一つ一つのなんとかけがえのないことか。「成長」という言葉の本当の意味に今ようやく出会ったのではな



いだろうか。つまり成長とは、「進む」ということではなく「ひろがる」ということであり、はじまりに現われたものが一生を通して意味を持つ：そういうことが言えるのではないだろうか。なんとなく、そんな深遠な気持ちに包まれつつ、今回も息子の今をとらえてみたいと思う。今回のテーマは——ことば——。

——あつたかい・あついで——

お風呂は好きなんだけど頭からジャーがいやなK。今夜もお風呂に入ろうかと言うと、「お風呂あついの」と不機嫌そうに言う。時間もおそくなりお風呂は取りやめ。ところが寝る時になって（母のふとんにもぐりこみつつ）「おふろはいる！」と言う。「明日入ろうね」と言う。「おふろはいる。おふろあつたか（い）」と言う。

——二才三ヶ月——

食事の時、スープの皿をさわりながら、「パパとママのはあついでしょ」父「そうだよ」「けいごのはね、あつたかいんだよ。」そういってスープをおいしそうに

飲む。

——三才一ヶ月——

Kにとって「あついで」は自分に害を加えるものであり、「あつたかい」は自分を包み保護するイメージがある。何気なく口に入れたみそ汁があつた時の驚きと痛み、今度はどうかな、とおそるおそる口をつけてみて大丈夫あつたかい、とわかった時の笑顔。文字通り体験を通して言葉を味わっていったK。寝る前になっておふろのことを思い出し、入ってもいいな、と思ったKは「おふろあつたか（い）」と言う。うっとりとした口調でそう言う。「あついで」といって拒否したものを、「あつたかい」と言って受け容れる。そこにKの思いがある。「あつたかい」に込められた思いがある。

「あついで」は大人のものであり「あつたかい」は自分のものだと考えているK。同じように「からい」も大人のものとしている。そして時に「もう大きいから」とか「大きくなったら」と言って「あついで」や「からい」を味わってみようとし、口をゆがめ、やっぱりちがうとい

う顔をする。そうやって又何かを心の中のためにこんでいる。

——ねねね・それは——

保育園の保護者会からの帰り道、急にKの言葉（言い方）が一つ増えたことに気づく。それは、……ねねね（と、ねねねで言葉をつなぐようになったこと。「ごろごろのね、ねねねのどのね、ねねね、おくのね…」という様に、夜寝る前にも「むかしね、ねねねあるところね、ねねね、三びきのね…」と話してくれる。

——二才三ヶ月——

朝、気分良く起きてきておしゃべりを楽しむ。「おじさんがね、こうえんでね、おとこのこをぶったのね、それは、わるいね——」。

——三才三ヶ月——

はじめて「ねねね」に出会った時、私はまるで知らない誰かを見るようにKをまじまじとみつめてしまった。

何かが確実に変わったのだ。「ママ！」と呼び「牛乳ち

ようだい」と言い、「いっちゃだめ」と泣き、そうやって自分の欲求や気持ちを表わすものとして身につけていった言葉の世界に、新しく一つ、「語る」という世界が加わったということなのだろうか。

そうやってKは次々に新しい何かを身につけていく。一年後、Kはもうすっかりおしゃべりが板についている。そして思いがけない言い回しをして大人を笑わせた。驚かしたりする。「それはわるいね」と言うK。どこで覚えたのか、どのように理解して使っているのか、それは解らないけども、心の内にはもっといろいろなK自身の解釈が過巻しているのかもしれない。それが時折、潮が満ちるようになって外にこぼれ出す、新しい言葉や言い回しとして。そのために時があり、その面白い時を味わいそこねないために、そばにいる大人は、心をゆったりさせていたものだ、しみじみ思う。

——そのとき——

なしを食べながら、一口食べては「その、とき、にわとり

がいました。ガブリ。そのときわんわんがいました。ガブリ。そのとき！ グワーングワーンていました。それはおおかみでした。ガブガブ……。」

——二才九ヶ月——

なしを食べながら、「そのとき！」と決然として言うK。ガブリとかみつく度に確実に姿を変えるなしに、Kは犬や狼を見る。そして又、ガブリとかみつく。確実に変わっていくなしを見つめつつ、Kはさっきとは違う今を味わう。ほんの一秒後であったとしても、それは全く違う「そのとき」なのだ。経過していく「時」そのものをKは味わい遊んでいる。「時」を遊ぶようになったK。

「昨日」という言葉が「過去」全てを包んでいたころ、電話で田舎の祖母と話している時に、「きのうおまつりに行ったねー」というKの言葉に、祖母が「きのうじゃないでしょ」と何気なく答えると、ひっくり返って泣いた。同様に「未来」は「明日」であったKが、「今度、デ

イズニールランド行こうか」と言うようになる。「明日」の他に「今度」が、「昨日」の他に「前」がKの中に出現する。それがいつのことだったのか、残念ながら私は記録していないけれども、「時」のイメージはこうして確実に、Kの中でひろがりを見せていく。

「そのとき」遊び。あなたもやってみませんか？

——けいごみてな・どしたの？ってきいてあげる・けいごだっこしてたから？——

夜TVをみていると、これが「お母さんが死んじゃった子の話」私はこういうのに弱い。涙がポロポロこぼれる。するとKはびっくりした顔で私をみつめ「どしたの？ こわくないよ。」それでも泣きやまないの、「けいごみてな」と励ますように言う。それがまたいじらしくて泣けてしまう。TVの向こう側とこちら側で両方ドラマをやっているよう。結局、Kが気の毒がって、「TVパチンしよう」これで一件落着。

——二才八ヶ月——

新聞に「ビートたけし」の事件が載っている。読みながら思わず「たけしかわいそー」とつぶやくと、他のことをしていたKが、ガバツとふりむき「たけしくん、どしたの?」「けいご、どしたの?」って言ってあげる」と言う。「けいごやさしいねー」としみじみ言ううと気を良くし、さらに「ここ(とひざごぞうを指さす)ころんだの? けいご、薬かってきてあげるよ!」

——二才十一月——

保育園からの帰り、久しぶりにダッコで家まで帰る。暑くて暑くて汗だらけ。「おかあさん暑いから、とにかくシァワーをあびてくるわ」と言ううと、ちょっと考えていたK。ぼつりと「けいごだっこしてたから」と言う。

——二才七ヶ月——

しきりにおしゃべりをするようになったKは、同時によく聞いたり見たりしている。そして、よく考えている。

TVをみながら泣いている私がKには不思議で仕方が

ない。何故なら、Kが泣くのは怖い物が出てきた時なのに、TVの画面には一つもそんな物は写っていない。おかしいな—と思うつつ、Kは私を励ます。自分がいつもしてもらっているのと同じ方法で。「けいごみてな」と言った時のKのまなざしには、たのもしさとやさしさがあふれていた。

子どもは、このようにして大人を写しとる。自分が得たものを人に与える。自分の経験した範囲でしか物事が考えられない、という言い方も成り立つかもしれないけれど、私には、「幼なさ」というより「本質」ではないかと思えて仕方がない。

私の職場(幼稚園)で、今春、園長先生が他園に移られた。4月の半ばころ、離任式が行なわれた。クラスの子ども達(年長組)に、「明日、前の園長先生がみんなに会いにきてくださるのよ」と話すと、真剣に話をきいていたB君が言った。

「そうだよ、園長先生、何にも言わないで行っちゃったんだもの。行ってきますも言わないで」

私のどんな説明も必要のないB君の一言だった。子どもというのは、いつでも自分に深くかわわっている部分で物事をしっかりとらえている。

少し考えて「けいごだったこしてたから」とつぶやいたK。同じ「考えて」言ったのもこれは前の二つとはちがう意味をもっている。ふーふー言いつつ、それでも久しぶりの求めに応じ気前よく家までダッコした母親との道のりと、家にたどり着いた母親の一言から、Kは考える。そして言う。「けいご、だっこしてたから」と。ただそれだけのことだけれど、私は妙に満ち足りた。Kの心の中を、何かが行ったり来たりしたような気がして、私は妙にやさしくなった。

不思議なことだと思う。何も期待していない時に、子どもはひょいっとつぶやく。それがどんな意味を持っているのかはわからないけれど、心に残る一言をつぶやく。

——エーエー、エーエーりょうたるう君になったK——

おふろからあがり気嫌よく一緒に入浴した人形を並べて遊ぶ。畳のへりに一直線に並べて遊ぶ。母親があきてゴロリと寝てしまっても一人で遊び、エーエーと言っている。そこへ父親が帰って来る。(以下、父親が記す。)母と父が話していると急に手を伸ばし「エーエー」とやりだす。「エーエ、エーエ」起きあがって「エーエ、エーエ。」すぐに赤ちゃんの真似だなと思うが、それにしてはいつものと様子が違う。

「どうしたのけいご」

「エーエ」

エーエと言いながら、それだけで何かを表現しようとしているようだ。

「なんなの?」「エーエ」「赤ちゃんなの?」「エーエ」

どうやら赤ちゃんのようなのだが、いつもの「赤ちゃん」は大人との関係によって全て反応するが、今の「赤ちゃん」はそれだけでなく、頭の中にある一つのイメージを自分で表現しているようで、こちらがわからない所がずいぶんある。

「エーエ、エーエ」「赤ちゃんなの？ けいご」「誰なの？」

何度か聞くと、急に「りょうたろうだよ」と言う。

「ええっ。りょうたろうなの？」

「けいご、りょうたろうやってんだよ。」

「何組なの？」

どうやら、保育園の0才か1オクラスのりょうたろう君の何かを表現しているらしいことがわかった。

これは、Kにとって歴史的なことだ。「赤ちゃん」という役割ではなく、「りょうたろうくん」という具体的な人をこんなにも演じることが、はじめてだ。

その後も「エーエ」と言いながら起きだしてイスのぼり壁にうつった光を指さし「エーエ、エーエ」「りょうたろう君、はやく寝なさい」と言う。「エエエ！」いやだと言ったつもりなのだろう。「エエ語」がよくわかるようになった。

やがて、りょうたろう君になったKは、りょうたろう君のまま、ゆっくり寝ついた。——二才八ヶ月——

「エーエ」というつぶやきを、私は何気なく聞き流していたけれど、途中で帰ってきた父親は、Kの姿に何かいつもと違うものを感じとった。そして、その謎を追求していった時に見出したのが「りょうたろうだよ」という答だった。

私は、次第に眠気もさめていった。確かにKは、『頭の中にある一つのイメージを表現していた』のだ。

「エーエ」というつぶやきは、ただそのままに受け取れば何でもないつぶやきだろう。いつもの赤ちゃんの真似として理解されるだけかもしれない。ところが、この時の父親のように、感じとる心があると、それは全く違うものとなる。Kのしていることが次第に明確になり、Kのしているつもりのこと（意志）が明らかになる。「そうなんだね」と親がはつきりわかった時、Kは、通じた喜びを感じたにちがいない。とても大切なことを、私は父と子の会話から学んだように思う。

——もうおおきいよね——

夜、「カメラをかして」と言い出す。おじいちゃんが「このカメラはけいごにあげよう」と言ったのを覚えてる。でもカメラはおもちゃじゃないんだから、と父に言われる。「もう少し大きくならないとだめなんだよ」で大泣きする。しばらくして夕食を作っている私のところへ来て「けいごもう大きいよね」と訴える。「おにいちゃんだもん、大きいよね」と。そこで窮余の策。「けいごはもう大きいんだけどね、カメラを使うのは、ひげがはえるくらい大きくないとだめなのよ。」それに答えて「けいごひげある。」そしてほっぺをさわる。それから少々気分が変わり、「パパはバツ！」どうやら父親を悪者にして気をおさめたらしい。

——二才十一月——

三才が近づいてきたころから、Kの「大きいんだよ」がよくきかれるようになった。Kはこの言葉を力の拡大として使っている。「もう大きいんだもん」と言えば、摩法の呪文のようにして、どんな秘密の扉も開くにちが

いないと思っている。だから、それが否定されるとKは怒る。こんなに大きいのに、と思うから。

もうすぐ兄になるK。小さなキューピー人形をズボンの中に入れ「あかちゃんおなかの中なの」と言う。ある時、その小さな小さな人形とおしゃべりしていたK。

「いいかい、どっちが大きいかなー」

Kは人形を床に置き、むかい合って真面目な顔をして背比べをはじめた。5センチにも足りない人形と背比べをし、そして安心したように「ほらね、おにいちゃんの方が大きいね」と言う。

夏には兄になるK。きつと又、とびきりの一年が私達を待っているのだから。一年後にどんな報告ができるか、今から楽しみです。